

都市とムラを結ぶ踊りの輪

— 沖縄一集落の伝統行事シニグを支える人たち —

石井 宏典

要 旨

沖縄本島北部に位置する一集落において長く継承されてきた伝統行事の場を考察することを目的として、7年にわたる参与観察と担い手たちへのインタビューを行った。そのさい社会心理学の立場から、あらたなつながりが生み出される過程に注目した。踊り手が減った神前舞踊は郷友会からの参加によって支えられ、踊りの二重の輪は初心者への参加を可能にする身体配列でもあった。かつては、内側の輪で小太鼓を打ち伝承歌を歌う熟練の中・高齢者、外側の輪で踊る青年、周りで踊りを見る子どもたちといった三重の輪ができ、そこにライフサイクル全体にわたる社会化の過程が織り込まれていた。現在、古い先祖の代から連綿と受け継がれてきた踊りの輪に加わることは、子ども時代とは大きく様変わりしたふるさのなかに連続性を見出し、自己をその連続性に位置づけようとする営みといえる。

1. フィールドと研究課題

1. 2007年のシニグ

水田のほとんどなかった備瀬^{びせ}ムラではかつて、主食となる甘藷を周年栽培しながら、旧暦3月には麦やそら豆、そして5月から6月にかけては粟や黍の稔りを迎えた。それらの収穫を終えると酷暑のため農閑期に入り、旧暦7月は行事が続く。家ごとに先祖を迎える盆行事を終えた後は、一週間続くムラ単位の七月行事が始まる。神人^{カミンチュ}たちはいまでも、20日のウプユミマーで豊作豊漁と航海安全を祈願し、22日のサグンジャミではムラ内を巡って祓いの儀礼を行う。この行事は、お盆で迎えてもらう家をもたない無縁仏を供養し、帰るべき所に送るという意味が込められているという。ムラ内でさまよう仏たちをすべてグソー（後生、あの世）に送った後は、23日の男のハシチと24日の女のハシチで子どもたちの健やかな成長を祈願し、25日のシニグで女たちが輪をつくってウシデーク（白太鼓）と呼ばれる神前舞踊を舞う。26日のタムトノイは行事の無事終了を神に感謝し、神人たちを慰労する。

2007年の夏、本部半島^{もとぶ}の先端に位置する備瀬集落に滞在し、お盆からシニグ当日に至る

日々に立ち会うことができた。ただ、このときのわたしは、ムラの七月行事そのものについて関心を向けていたわけではなかった。そんななか、かつて紡績体験を聞かせてもらったのが縁で顔見知りとなっていたフミさん（86歳）を訪ねた。長く畑仕事に勤んできた彼女は足腰が弱り、日中は自宅ですり過ごす日々を送っていた。

9月3日（月） 旧7月22日

10時前、フミさんを訪ねる。座敷でひとり椅子に座っていた彼女は、「さみしかったからよかったです。さみしいのがいちばんの病」と笑顔で迎えてくれる。よいタイミングで訪ねられたことを喜ぶ。その後はつれづれなるままに話を聞く。12時きっかりに来るはずのヘルパーから時間を延ばしてほしいという電話が入ったので、二人でふかしたナカムラサキ（紅芋）を食べながらもう少しおしゃべりを続ける。…フミさんは話の途中で25日のシニグのことを気かけ、那覇のミエさんが来られるかどうかの確認の電話をかけるように促す。電話をかけてみると、当日は3人姉妹揃って参加する予定とのこと。そのことを伝えると、フミさんもうれしそうな表情を見せた。

この年のシニグは、ムラで不幸が続いたこともあって、大正から昭和一桁生まれのウタムチ（歌持ち、シニグ節の歌い手）の参加があまり見込めず、フミさんが「シニグの親分」と呼んだ千代さん（89歳）もまた姉を亡くして踊ることのできない身にあった。そんな事情を受けて彼女は、ミエさんが今回のシニグに参加するのかを気にしていたのだ。ミエさん（87歳）は、那覇の新天地市場で衣料品店を営む傍らで備瀬の神人を務めてきた人で、しばらく備瀬郷友会の婦人部の面々をシニグにつなぐ役目も担ってきた。

そして当日、ミエさんは妹の幸子さんたちとともにシニグに参加した。

9月6日（木） 旧7月25日 シニグ当日

午前中、忠勇ヤー（屋号）のキヨさん（77歳）に今日のことを聞くと、どうなるのか気を揉んでいた千代さんも埒があかないのでデイサービスに行ってしまったらしい。しばらくしてアサギ（お宮）をのぞくと、今日のことを案じるキヨさんたち4人の姿があった。お昼時にノロ殿内で、シニグ節を吹き込んだテープを使つての歌合わせ。千代さんという指導役が不在の中、ニガミの松枝さんが手踊りを指導する。…

14時前にふたたびアサギに出向くと、ミエさんたちが到着していた。…アサギで歌、チヂン（柄の付いた直径30センチぐらいの小太鼓）を合わせる練習をする。よきモデルが不在のため、それぞれが見よう見まねで手を上げバチを叩くため、なかなか合わない。一時散会、みな着替えに行く。…17時前、アサギでの御願の後、ニーヤー（ムラの旧家）で本番が始まる。ニーヤー前にできた輪はチヂン4人でウタムチは不在、その周りで踊る人たちを合わせても15人と少なかった。千代さんも駆けつけ、女たちの白いマンサージ（鉢巻き）を締めるの

を手伝う。踊りが始まると、合わない太鼓に業を煮やした千代さんが自ら太鼓を持って輪に入り指導する。結局、輪の中央に一人座ってウタムチを担当した千代さんの歌だけでは間に合わず、テープをかけて太鼓と踊りを合わせる。…最後にアサギ前での踊り。ここでも見かねた千代さんはチヂンを持って輪に加わり、手本を示す。周囲で見っていた先輩のおばあさんたちの歌声が大きくなり、心許ない踊りを加勢する。

ウタムチがまだ多かったときのシニグを知っているわたしは、ウタムチ不在でテープの助けを借りるといった思いがけない展開を前にして動揺した。この次の年のシニグには立ち会えなかったが、状況は変わらなかったと聞いた。シニグはこれからどうなるのだろうか。そんな焦燥感を抱えながら2009年からシニグ通いを始めた。

2. 研究の課題と視点

シニグは、琉球北部圏で広く行われきた集落単位の神行事である。シヌグと表記されることが多いが、備瀬ではシニグと呼ぶ。それぞれに類似性と独自性を抱えた各地のシヌグは、民俗学を中心に研究者の関心を集めてきた。備瀬のシニグについても、祭祀の詳細を記述し、その由来や原義を探る試みがなされてきた。筆者は社会心理学の立場から、生活環境が著しく変化するなかでこの行事を守りつづけてきた神人に焦点をあてた二つの論考を発表した(2013, 2014・2015)¹。本稿は備瀬の神行事についての第三報であり、今回はシニグの日に踊りの輪をつくる女たちの動きに注目したい。

シヌグは、作物の収穫を終えてつぎの新しい農作に移る前という節目に行われ、一連の祭祀の最後には、ムラの女たちが神前で輪をつくり踊りを奉納するという流れをとるところが多い。備瀬を含め、本部町各集落(旧村)のシヌグを網羅的に調査した仲田(2003)によれば、この行事は町内13の集落において簡略化を含みながらも継承されており、そのうちウシデークを舞うのは9つのムラ—瀬底、崎本部、辺名地、渡久地、伊野波、並里、浜元、具志堅、備瀬—である。祭祀の時期は旧暦7月20日前後に集中しており、期間はそれぞれ3日から8日間と幅がある²。期間中の一連の行事全体を指してシヌグと呼ぶことが多いが、備瀬では一週間続く行事のうち、神前舞踊を中心とした7月25日の祭祀のことをシニグと呼んでいる。また、この舞踊は備瀬においてもウシデークと呼ばれるが、舞踊そのものを指してシニグと呼ぶ場合もある。

備瀬のウシデークは、旧家や神アサギ前の広場など4つの場所で、女たちが二重の輪をつくり、ゆったりとした曲調の歌に合わせて、反時計回りに巡りながら踊る。現在、この踊りの輪に加わるのはムラに住む人だけでなく中南部や名護といった都市部に住むムラ出身者も多い³。したがって、この行事の場を考察するためには、備瀬集落だけでなく中南部において編成された同郷コミュニティの動きを視野に収めなければならない。そのさい、戦後の復興期に立ち上げられて現在まで活動を続けている郷友会(同郷会)の他に、老年期を迎えた

出身者たちによって編まれている同郷コミュニティの動きも押さえる必要がある。

ちなみに、ムラ在住者と出身者が共同で年に一度のシニグを営むというのは、備瀬に限った動きではない。遠藤（2006, 2012）は、国頭村安田集落で旧暦7月のシニグのときに行われるウシデークが那覇の郷友会の女性たちによって支えられてきたことを報告している⁴。具体的には、1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会における芸能祭への出演が転機となって郷友会がウシデークの練習を恒例化させたことや「音取り（ニートウイ）」と呼ばれる歌のリーダーが郷友会のなかから誕生したことなどが紹介されている。興味深いのは、ムラでウシデークの練習を始めるのは行事の1週間前からというしきたりがあったが、郷友会側はこのムラの慣習から離れ、5月中旬から月2、3回の頻度で練習をするという独自の動きをみせている点である。林（2012）の報告も同様に、国頭村奥集落のウシデークに那覇の郷友会からの参加が重ねられてきたことを伝える⁵。奥郷友会がウシデークの練習に取り組み始めたのは1988年からで、その後月に一度の練習を行うようになったという。2007年のウシデークに参加した31名のうち、郷友会からの参加は16名であった。

ここで、研究の目的を定めたい。本稿は、社会心理学が重視する関係論的視点に立って、ムラに住む者と都市の同郷コミュニティの成員とが共同でムラの伝統行事を受け継ごうとするその過程を考察する。より具体的には、備瀬のシニグのこれまでの歩みを辿ったうえで、現在この行事を支えている担い手たちの動きを丹念に把握し、そうした共同の行為をとおして個人やコミュニティレベルにもたらされる影響について探ることを目的とする。なお、本稿の記述はおもに2009年から2015年まで7度にわたるシニグの場への参与観察と、備瀬、那覇、中部で実施した担い手たちへのインタビューにもとづいている。

II. あるウタムチが体験してきたシニグ

1. ウタムチの輪に加わる

ここでは、備瀬のシニグの歩みについて、ひとりのウタムチの語りをとおして辿ってみたい。2009年の七月行事が始まる前、90歳を迎えてなお現役のウタムチだった玉城千代さんを自宅に訪ね、シニグ行事へのかかわりを中心に彼女の生活史を聞かせてもらった。何度か重ねたインタビューで彼女はいつも、インスタントではないコーヒーを煎れてくれた。

千代さんは、5人きょうだいの末子として、1919（大正8）年に備瀬で生まれている。1934（昭和9）年、数え16歳のときに山口県の宇部紡績に働きに出たのを皮切りに、しばらく旅暮らしが続いた。20歳でいったん帰郷すると今度は、当時多くの同郷人を集めていた沖大東島（ラサ島）に渡り、隣鉱石の鉱山で土担ぎや炊事の仕事に就いた。父親の葬儀のため一時帰郷した折には、それまでの稼ぎで屋敷を買い、先祖の墓を造っている。しかし沖縄戦で家屋は焼失した。1940年に長女を産むと郷里の母親に預けて働き続け、1945年には

旅先で次女を出産した。後に、この次女の和恵さんがシニグの輪に加わることになる。

〈旅暮らしから定住へ〉 [2009-09-07]⁶

聞き手：(終戦後に) 帰ってきたときの備瀬っていうのは?

千代：よくも来たら、こっちにうちの母が小さなお家を(建てて住んでいた)。一人からは何間なんけんいうて、みんな材料配当して造っている。それからわたしはもう、苦勞が始まったわけ。小さいでしょう、お家が小さいから、茅を刈りてきて台所造ったり、いろんなことして。それから商売始めて、酒を造ってから、一人じゃなくて二人連帯して、酒を運んで今帰仁のホテルに持っていったり、米を買って石川(現在のうるま市石川)まで持っていったり、いろんなことした。それからわたしが30歳ぐらいのときに普天間に行って。普天間で2カ年いて、それで帰ってきて。畑もみんな(米軍の)滑走路になったところ、畑もみんな耕してから、それからはもうずっと備瀬。

聞き手：普天間では何をされていたんですか。

千代：設営隊(普天間飛行場を建設する工作隊)の炊事に働いていたわけ。あのときは苦しい、苦しい生活だったから、わたしは母もいたし娘二人もいたから、お母さんに預けて働かなければもう4名の生活ができないので、働いて、いろんな仕事をして。普天間(工作隊)が解散になったので向こうが。それでお家に帰って来てから、それからこの備瀬の部落のいろんなことがわかったわけ。そのときまでわからなかったわけ、ずっともう旅の生活だから。

帰郷してから普天間に出る前、千代さんは再開した「七月モーイ(舞い)」と呼ばれるムラの盆踊りの輪に加わっている。踊り手たちは招かれた家の庭でその家の栄え繁盛を願いながら踊り、金や酒の祝儀を受けとった。そして、この祝儀で戦争により失われたシニグの太鼓を少しずつ揃えていった。

〈盆踊りの祝儀で太鼓を揃える〉 [2009-09-10]

千代：(七月モーイの歌は) 明治の人がね、歌っていた。それに大正の人が混ぜて、男も女もみんな混ぜてから踊って、金もらったり、酒もらったりして、それを売って太鼓買ったり、ゴザを買ったり、そんなにしよったわけ。終戦後は何にもないでしょう。…これ(お盆後の) 17日までやって、18日になると初枝さんの曾おばあさん(シニグ節の指導役、後述)のお家の庭に集まって、それから太鼓もないから、手を打って。それで太鼓がまた出たら、太鼓は二つ、南に一つ、北に一つだったわけ。で、また翌年に、また二つ買って、七月モーイしてから、これで買って、北に二つ、南に二つ(と増やしていった)。これからみんなもう平和になって復興したので、あれから太鼓、寄付されて、こっちからも寄付されて、それから太鼓が多くなったわけ。…またムラからも太鼓を買って、それで太鼓多

くなくなったわけなんです。

千代さんは普天間から戻るとまもなく、シニグ節を稽古する輪に加わった。当時、ウタムチの中心は明治前半生まれの年配者たちで、大正生まれは彼女が最初だったという。

〈シニグ節の稽古の輪に加わる〉[2009-09-10]

千代：アサギ（お宮）にみんな集まってきて、「こっちはこうしなさい、こっちはこうしなさい。太鼓はどんな持ちなさい」いうて、〔語気強く〕うんともう、練習させよった。…この昔のおばあちゃんたちが、7、8名いたんじゃないかね、そのぐらい、わたしが出始めなりに。北⁷のほうが多い、ウタムチの人。わたし、太鼓のこのブイ（パチ）で、〔笑いながら〕頭叩かれたことがある。…あんなに厳しかったよ。…あのときまではもう、おばあちゃんたちがたくさんいた。昔の明治のおばあちゃんたちが。…この人たちが教えよったわけ。歌は、ミーヤグワーのおばあさんが教えよったけど、手なんか、太鼓の持ち方なんかは、足の踏み方なんか、このおばあちゃんたちが「どんなにしなさい。なんでこんなする。こういうふうにしなさい」いうて、とっても厳しかった。…いまはもう簡単。

当時、シニグ節の稽古の中心にいたのは、この語りに登場する「ミーヤグワーのおばあさん」だった。ミーヤグワー（新家小か）というのは、この老婆が住む家に付けられた屋号である。名前は大城マツといい、1868（明治元）年辰年の生まれで、このときにはすでに80代半ばになっていた。90歳をすぎるまでシニグ節の指導を続けたという彼女は、ユタ（巫女）でもあった。かつて八重山で生活していたが、長男夫婦を亡くすという不幸に見舞われて、1937（昭和12）年ごろに孫二人（兄と妹）とともに帰郷している。しかし、この兄妹の兄のほうは、米軍上陸のさいに幼い娘を遺して命を落とした。この遺された娘が初枝さんで、彼女は現在シニグを支える中心人物のひとりになっている。

千代さんが加わったときのシニグは、踊りの輪は三重だったという。

〈シニグに出始めのころ〉[2009-12-27]

聞き手：いちばん最初にシニグをやったころっていうのは、踊る人、歌う人はどれくらいいたんですか？

千代：はあー、輪がもう二、三（重）。歌（ウタムチ）は二重にして。若いのは真ん中、その他は二重のところはウタムチが、外周りは踊る人が。三重にもなっていたから。…若い人はね、マンサージ被ってから、真ん中になりよったわけ。…まだ嫁に行かない人なんかよ。ウタムチは二重になって、両方になるわけ、南と北と両方に、こっちがやったら（歌ったら）向こうがペーシ（囃し）する、向こうがやったら（歌ったら）こっちがペーシする、あんなにして。踊りは外周り。だから二、三重の周りだったわけよ。



(兼次辰也氏提供)

写真1 1950年のシニグ

写真1は、終戦後5年目にあたる1950（昭和25）年のシニグで、千代さんが普天間で働いていたころとみられる。アサギモーと呼ばれるお宮前の広場で、踊りは二重の輪をつくっている。内側の輪に注目すると、太鼓を持つ人たちが二組に分かれているのがわかる。千代さんの語りに照らすと、それぞれが北と南のウタムチたちで、歌と囃しを交代しながら務めていたのだろう。ただ彼女の語りとは異なり、輪は二重で、若手のウタムチだけの輪はない。彼女が加わったところにはウタムチが増えて、若いウタムチは一番内側の輪を作っていたのかもしれない。そして目を引くのは、踊り手の輪を囲む見物人の多さである。とくに子どもたちが目立つのは、現在とまったく異なる光景である。踊りをじっと見つめる人びとの姿勢からは当時のシニグの吸心力が伝わってくる。

2. シニグ節を受けとる

終戦後に各地からの引き揚げ者を吸収して急激に膨れあがったムラは、1950年代に入ると一転して、流出の時代を迎える。女たちは、那覇の新天地市場と呼ばれる衣料品市場への移動が目立つようになった⁸。

〈新天地市場への流出〉[2009-09-10]

千代：（ミヤグワの）おばあちゃんのお家で（シニグ節を）習う人がたくさんいた、い

ただけど。もう30名ぐらい、もうこの庭のいっぱいいたんだから。それでもう、一人抜け二人抜けしてから、それからミシン（で衣料品を作って売る商い）が盛んになって、（那覇が）復興し始めてからどっど行って、残ったのが（同世代で）わたし一人だったわけ、最後に。

戦争で夫を亡くした妻たちに援護金（遺族年金）が支給されるようになると、それを元手に那覇で商売をしようとする人が続いたという。千代さんもまた、中学を卒業した長女が同郷人の元で縫い子として働き始めたこともあり、家族で那覇に移ることを考えている。迷いのさなか、遠縁にあたるニーヤーのおじいさんにかげられた一言が、彼女を備瀬に踏みとどまらせた。ニーヤーは、代々ノロを出す門中（^{ムンチュー}親族集団）の元家である。

〈備瀬にとどまる〉[2009-12-28]

千代：わたしは、そうかね、（那覇に）出てはどんなかね、行く道が。向こう行ってお家借りて生活できるかできないか、これはもう、自分の身売るのか、どっちかひとつに決めないといけないと思っていた〔笑う〕。覚悟していた、このときには。それで、ニーヤーのおじいさんが、「ただ簡単に考えていくと、どん底に落ちていくような感じになるよ」って言いよったからね。「そうかね」と。「農業したら、少しでも生活に困らないようになるんだから、こっちにいたほうがいいよ」って。…そのおじいさんがそう言うたので、わたしは「そうかね」（と思って）、わたしはそれに迷っていたわけ。迷ってひとつひとつ考えると、行ってはお家借りるし、金はないし、仕事場もないしどうしよう、…もうあれこれ考えると、やっぱり自分の生まれた土地で、コツコツ農業やって、それで生活やればそれでいいじゃないかと思って、それで止まったわけ。

ムラに残った彼女は農業で生活を立てながらシニグへの参加を重ねた。そして、まだ一人前のウタムチになる前の40歳のころ、不思議な夢を見ている。お宮から、髪を足下まで長く伸ばした女の人が出てきて、彼女にシニグ節を教えるといった内容だった。

〈一人前のウタムチになる〉[2009-12-28]

千代：（夢のなかで）お宮から出てきて教えたのが、自分がまだ若い40歳ぐらいかね、そのときだったはず。珍しくて。（それからしばらくたって）わたしがぜんぶ歌を受けとったときには、「えー、こんなこともあるんだ」と、自分ひとりの心の中に、思ったよ。ノロさんがわたしに歌を教え、お宮の中から出てきて、もうこの髪を自分の足下のように（ところまで）長くて、歌を教えたのは珍しくて。「わたしに歌を教えたのはほんとノロさんだったのかね。お宮のなかから出てきよったけど、珍しい」いうて。あのときはもう、見たときにはとっても珍しかったので、（後に）自分が一人前になって歌を歌うようになっ

たから、「あー、これはほんとだ」いうて。それで、お宮に行って、だいたいはお宮に行って、いろんな拝みしたのは42、3歳のときから。もう50歳のときにはもうすでに覚えていた、ぜんぶ。

当時、ウタムチたちは7月18日からミーヤグワーに集まり稽古を始めた。20日の夜にはウブユミマーの行事を終えると、お宮の前で「カリーシキ（嘉例付け、めでたい先例を付けること）」を行い、22日の晩に神人一行が集落内を巡るサグンジャミのさいにも、お宮の前で稽古をした。23日と24日の午前中には、ニーヤーの敷地内にあるノロ殿内で稽古をしてから、お宮でウタムチの御願を行った。25日シニグ当日の午前にもまた、ノロ殿内で嘉例付けをしてからお宮で三度目のウタムチの御願を行った。なお、これらの御願のときに供える神酒は「ウタムトゥウグシー」と呼ばれる。

〈ウタムチの御願〉 [2009-09-10]

千代：(23日には) 昔はニーヤーに朝9時から集まって、そこで稽古して。3回はそこでニーヤーで踊ってから、そこからミチジュネーの歌して（道行きの歌をしながら）お宮に行って、この太鼓をウタムトゥ（神殿と拝殿の境に置かれた丸太）に置くわけ。そのときにノロさんたちが、ウタムトゥウグシーとって、ムラから出るわけ。お神酒が出るわけ。そのお神酒を、今年の七月の行事が始まるからいうて、お祈りするわけ、ノロさんたちが。それで、「^{カミニンジュ}神人衆と^{ワハムン}シニグ若者（神人の手足となる男たち）のとの協力で、今年の25日まで立派に、足もブラブラさせないで立派にさせなさい」いうて、ノロさんたちがトート（拝み）するわけ。わたしたちもウコー（線香）持ってトートするわけよ。それから始まるわけ。23日から始まって、24日、25日、（最後の）26日はタムトノイでしょう。…神人衆とシニグ若者と、太鼓持つ人何人かと、「もう今年は無事にすませました」ということを祈るわけ。また、ご馳走作って。

23日から25日当日までの稽古のさいには、お宮に入りきれないくらいの踊り手たちが集まり、あちこちからおにぎりや芋の天ぷら、飲み物などの差し入れがあったという。

3. 歌に込められたムラの風景

現在歌われているシニグ節は5曲で、歌う順に上げると、首里の玉節（^{すいていんじやなし}首里天加那志）、^{ていんぬぶりぶし}天の群星、^{うちまみ}打豆節、^{なんまち}くびる並松節、^{みぐ}はんた廻い節である⁹。千代さんによれば、かつては7曲歌っていたが、難しい曲は抜け落ち易しい5曲が残ったという。彼女による歌の解説には、歌詞にはないムラ固有の場所が数多く登場し、それらの場所に包まれたムラ人たちの日々の営みが具体性を帯びて立ち上がってくる。なおじっさいの歌は、長く伸ばしたり、囃しが複雑に入ったりするために覚えづらく、聴いただけで意味をつかむのは至難である。

首里の玉節

- 一 首里^{すいていんじやなし}天加那志^{ももと} 百歳までちやわり
御万人^{うまんちゆ}ぬまじり^{うが} 拌りしりら
- 二 また何時^{いち なち}が夏なやい^{みや んぢ} あさぎ庭^{みや んぢ}に出て
玉黄金^{たまぐがに} みとうざ^{みとうざ} 手取て引ちゆら
- 三 玉黄金^{たまぐがに}みとうて^{みとうざ} さしたりぬ
玉黄金^{たまぐがに} みとうざ^{みとうざ} 手取て引ちゆら

踊り手は、ゆっくりと拌み手を繰り返しながら巡る。一番と二、三番とでは曲調が変わる。一番には「ユイサー」という合いの手が入る。

千代：一番は、首里の王様がいついつまでもお元気という意味。いついつまでも、みんなに拌まれてください。そして二番は、また夏がやって来て、アサギの前にみんな揃ってシニグをやりましょうという意味じゃないかね。出だしの「首里天加那志～」のところが長くて、とってもやりくい歌だけど、これがすんで「また何時が夏なやい～」からは歌いやすくなる。ここからはちらし¹⁰で、みんなが歌えるようにしてあるんじゃないかね。

天の群星

- 一 天の^{ふりぶし}群星^ゆや 数みば数まりしが
親^{うや}ぬ言^ゆし事^{ごと}や 数みやならぬ
- 二 あぬ星^{ふし}と月^{ちち}と 見並びて見りば
あぬ星^{ふし}や薄^{ちゆ}しさ 月^{ちち}や美^{ちゆ}らさ
- 三 月^{ふし}ば月^{ちち}ともて 明^ゆけぬ夜^{ちち}や知らぬ
肝^{ちむ}長^{さと}げさ 里^{あし}が遊^{あし}び長^{あし}げさ

手踊りは、左の押し手から右、さらに左、そして拌み手。囃しは「イササ、サァーサー」と入る。

千代：一番は、天の星は数えようとすれば数えられるけど、親が伝えてくれる教えは多すぎて数えられない。二番は、あの星と月とを比べてみたら、星は薄いけれど月はきれい。星は照らすのが薄いという意味。三番は、月夜に旦那さんが遊ぶのに夢中になってしまって、夜が明けるのも知らなかったというわけ。奥さんがいるのに遊んでいるから、奥さんが待ちくたびれてしまったという話。

打豆節

- 一 打豆^{うちまみ}やよ 主^すが豆^{まみ}

- 村ぬ豆てんど 主が豆てんど
 二 海ぬ魚いゆやよ 此くま魚
 てるしがまよ 此ま魚てんど
 三 へいまぬまとなか間渡中
あしは汗流てる漕うじゆる

手踊りは、前傾して下に出した右手を大きく振り上げる所作が特徴的。囃しは「アシーチューイー」と「シーチューイー」と掛け合う。

千代：この打豆（豆腐をつくる小粒の大豆）節というのはぜんぶ税金（税）の話らしいよ。いついつまでに税金を納めなさいと連絡があつたらしい。一番は、村の豆は、村の豆であつて主の豆、王様の豆ということ。二番は、ミーウガン（備瀬崎の小島）に灯台があるでしょう、この下に大きな岩があつて、この岩場の中に魚が入ったらまとめて獲つたという話。昔の人の話では、これも塩に漬けてから、税金として出したらしい。この岩場に入ったらもうザルに入ったのと同じだよ。「海の魚はこつちだよ」と。

三番の「へいまぬまとなか」の「へいま」は八重、「まとなか」というのは（リーフの外の）黒潮のところ、だから八重の潮路ということ。これは、伊江島までの海を渡る様子を歌っている。本部間切になる前の今帰仁間切の時代、備瀬は伊江島に近いから、何月何日には税金は何々出さなさい、いうて知らせるために、舟で向こうに漕いで行かしようらしい。渡るときには、竜宮神（ナカリュウグ）にお重を二つ重ねて、「無事に帰ってこられるよう、いかなる波風も静かにしてください」と、ノロ、根神が拝みしてから行かしようらしい。この打豆節は備瀬のものだから、かならずやるわけ。

- くびる並松節
 一 くびるなんまち並松 黄金くがにるる灯笼下ぎて
あかがうりが明さとぬしいに いもり里主
 二 小浜まびし備瀬 真中まんなかに 黄金くがにむいちゆく森造て
 小浜わかむん備瀬 若者みやらぬ 並ちゆい美らさ
 三 たまさ並松 黄金灯笼下ぎて
さとしぬうりが明さとしぬいに いもり里忍ば

右手に持ったジンビョーシ（銭拍子、30センチほどの踊り棒）を右肩に当て、それから両手で持って前に差し出す所作をする。合いの手は「ユイサー」。

千代：これは、北山城址であつた薩摩戦争（薩摩侵攻）の後のことの歌らしい。みんなそう言うてるから、そうかなって思うわけ。一番のくびるは備瀬崎のこと。くびるの東側にはきれいな松が岩の上に3本ぐらい生えてたけど、海洋博が来たころにみんなとられてなく

なってしまった。このくびるに、薩摩戦争で北山城址から逃れてきた男の人が来て、松明に火をつけて上げたり下げたりして、自分の無事をミーウガンに隠れている女の人に知らせるわけ。「くびるに明かりが灯ったら元気という合図だから、忍んで会いにおいで」と。ミーウガンには、女親と娘二人の遺骨があるという言い伝えがあつて、これを、ノロさんたちが大御願ウブウガンのときに拝んでいる。

二番は、小浜と備瀬¹¹の真真中に黄金森を造つて、娘たちが揃つてきれいということ。黄金森というのは、アサギンシリー（旧家）の後ろの方で、ニーヤーの西側のところ。こっちはうちが小さいころまで森になっていたわけ。三番の「たまさ」は（戦没者）慰霊塔の北側のところ。向こうも終戦まで松があつたらしい。ここに明かりが灯ったら女が男を忍んで行くということ。くびるとたまさ、北と南と、よく作ったもんだ。この歌の意味は、大城マツさんから聞いてわかるようになったわけ。

はんた廻い節

- 一 はんためぐ廻い廻い 木綿むみんぼた機廻い
 廻い合あわして 我わちあしや遊あそば
 二 七ななは葉たばくある煙草 はしらぐみひちよて
 里はるとなと畑いちや隣い 行逢いばでむぬ
 三 潮うす汲みみが行いきば 下ひちやぬわんどうま湾泊い
 水みぢ汲みみが行いきば 山田へんざ平安座
 四 石いしなぐぬ石 石いしぬ大石うふしなりまりん
 うかきぶさみせ 我わうす御主がなし

右手、そして両手のこねり手をしながら舞う。「サーサ」の合いの手が幾度も入る。

千代：これも恋歌。はんたは機、これは木綿機の話だよ。木綿の糸を紡ぐのに廻して使うもの。これが済んだら遊ぼうという意味らしいよ。昔の人、うちの姉なんかがよくこの糸を紡ぎよつたけど、木綿を買ってきて。この歌を聞くと、うちの姉のことが思い出される。二番は、葉っぱの煙草を大事に乾燥させて、丁寧に重ねて、恋人の畑は隣だから畑で会ったときにそれをそつと渡す、という意味。三番は、昔は潮で豆腐を作つたので、潮水を汲むときの歌らしい。備瀬は水があつたけど、桃原（隣ムラ）なんかは備瀬に来て水を汲みよつたわけ。南のハマガー、ウィガー（井泉の名前）には桃原の人も水汲みに来た。水汲みに行きながら会いましょうということ。四番、これは君が代と一緒に、石なぐの石、小さな石が大きな石になるまで拝まれなさいと。この石というのは備瀬のお宮のことじゃないか。この歌は三番までしかなかつたらしいけど、大城マツさんが来てからこれをちらしとして、一番しまいとしてやったという話だけど、あんまりわからない。

III. 加勢する郷友会

1. 1980年代～：那覇郷友会婦人部

農を中心とした自給的な営みがムラから失われていくなかで、ムラ人たちの神信仰への関心もまた徐々に薄れていった。そして、この流れに拍車をかけたのが、1975年に備瀬の南端を会場に組み込んで開催された国際沖縄海洋博覧会だった。この国家的イベントの前後からムラ外での賃労働に就く女性が増え、踊りの輪から就労期にあたる人たちの姿が減っていった。こうした状況を受けて、踊りの輪にあらたに加わるようになったのが郷友会の女たちだった。まず1980年代から1990年代にかけて、那覇郷友会婦人部による参加が活発となり、2000年代に入ると中部郷友会がその後続くことになる。

1980年代にまとまってシニグに参加した那覇郷友会婦人部の面々は、青年時代にシニグを踊ったことのある世代である。例えば、1928（昭和3）年生まれの節子さんは戦前に二度、シニグに参加しており、腰の曲がったおばあさんたちが髪を結い上げた姿がきれいだったことが印象に残っているという。また、若いときに踊っていたおかげで、中年期にシニグの輪に戻ってきたときにも体が踊りを覚えていた。節子さんより2歳下の幸子さんや小幸さんが参加したのは終戦後のことで、疎開先の熊本から郷里に戻って初めて踊ったという幸子さんによれば、当時は各家庭から一人はシニグに出るもの、という雰囲気があった。

彼女たちはまた新天地市場に向かった世代でもある。その先駆けのひとりであるミエさん（1920年生まれ、冒頭で紹介した人）が市場に出たのは1952（昭和27）年ごろだった。妹の幸子さんはその翌年23歳のとき家族で那覇に出て、やがて姉の元でミシンを踏み始めた。このころ、那覇の備瀬郷友会が10数世帯80名ほどの規模で結成されている。そして、節子さんや小幸さんも相次いで家族で那覇に移り住み、同郷人の縫い子として働き出している。こうして生活の拠点を那覇に移した彼女たちは、しばらくの間シニグから遠ざかることになる。シニグ節は行事のとき以外には歌ったり踊ったりしてはいけないとの言い伝えをつよく主張する先輩たちがいたこともあって、郷友会の集まりでもふれる機会はなかった。

そして、この世代の人たちがふたたびシニグの場に戻ってくるきっかけとなったのは、リーダー的存在であったミエさんが、1980（昭和55）年60歳のときにムラの神人に就任したことだった。彼女が神行事のたびに郷里に通うようになると、もっとも重要な行事であるシニグの場を盛り立てようと、郷友会婦人部の有志がまとまって駆けつけ、踊りの輪に加わった。当時、妹の幸子さんたちが婦人部の中軸を担っていたこともあって、参加者をまとめやすかった。1983年には、あるウタムチ（ウメさん）がノートに筆記していたシニグ節の歌詞集をコピーして配布している。そのなかには、現在まで継承されている5曲を含む9曲が取められ、歌と囃しがカタカナで表記されている。

ミエさんは、1989年に婦人部がシニグに参加したときの様子を綴った文章を郷友会40周

年記念誌に寄せている。「備瀬の神行事のひとつであるウシデークの歌を若い方々が習いもせず、これからあとのことについて悩みを訴えられた私はさっそく、那覇在住備瀬郷友会婦人部に話しかけて、皆さんが習うことに決まりました。私は直ちにウシデークの歌をコピーしてテープにとり、婦人部の皆さんに配りましたが、分かりにくいとのことだったので、先輩の仲村渠ハナさんを先生として頼み、1カ月にわたって与儀公園で練習しました。ウシデークの日にはすぐ本番にぶっつけ、歌や太鼓を打ち鳴らし、踊りも上手にできましたので、地元の方々もとっても喜んでくださいました（句点等を一部追加）。文中には明記されていないが、ミエさんに悩みを訴えたのはムラの神行事を司るノロ（天久千代さん）で、神人どうしという関係において持ちかけられた相談だった。

初めてわたしがシニグの場に立ち会った1993年のときにも、那覇郷友会婦人部の面々が貸し切りバスに乗って駆けつけ、踊りの輪に加わっている。その日のフィールド日記を一部引用しておこう。

1993年9月11日（土）旧7月25日、シニグ

昼の11時、ニーヤーの方では何やら女たちが準備中。石臼を回して神酒を造っている新垣光子さん。久しぶりに顔を見かけた大城好子さんは、足を痛めているためにウシデークは踊れないが輪の真ん中で座り、ウタムチを務めるという。やがてムラの女性たち（60代以上が多いようだ）が集まって太鼓と歌を合わせる練習を始めた。ニーヤーの次はアサギに場所を移し歌合わせをつづける。

いったん場を離れてからふたたびアサギに戻ってみると、さっきより人数がだいぶ増え、40人近くが歌合わせをしている。聞けば、那覇から郷友会婦人部が到着したという。総勢18名、バス一台でまとまって来た。正確な人数はつかめないが、中部や名護からも数名ずつ来ているようだ。太鼓を叩き、歌う女たちの表情はじつに楽しそうだ。互いにあーだ、こーだと口を出し合いながら、歌と踊りを思い出し、伝承していく。そうしていくうちに歌と踊りが一つになっていく。年に一度のこの日を楽しみに中南部からも集まってくる女たち。生き生きとした顔。彼女たちの心もからだもしっかりとここ備瀬につながっている…

本番の最後のアサギモーでは、踊りの輪を囲む観客のなかに踊り手たちと一体になって歌うおばあさんたちの姿もあった。

このときの参加者は46人を数えた。ただ、那覇郷友会婦人部によるシニグ参加はこのころまでが最も盛んで、その後は正座が辛くなったミエさんが神行事から遠ざかったこともあって、まとまって参加する機会が減っていった。

2. 2000年代～：中部郷友会とほたる会

2000年代に入ること、那覇郷友会の婦人部の動きと入れ替わるようなかたちで、中部郷

友会によるシニグ参加が活発になる。なかでも、「ほたる会」と名付けられた同級生模合に集うメンバーがその中心となった。彼女たちは1937年生まれで、小学2年生のときに沖縄戦を体験し、そして終戦後のシニグを見て育った世代である。19名のメンバーのほとんどは中学校卒業後に中南部や大阪で就職しており、大阪に渡った4名はいずれも同郷人経営のメッキ工場で働いた¹²。彼女たちは、子育て期を経て50代に入るとふたたび同級生どうしで集うようになり、月に一度の親睦模合を重ねてきた。

このほたる会のまとめ役を担う照子さんによれば、メンバーがまとまってシニグに参加したのは62、3歳というので、2000年前後のことである。参加のきっかけは、那覇郷友会の婦人部と同様、ムラの神人からの投げかけだった。模合の席で、会の一員でもあり備瀬のニガミ（根神）を長く務めてきた松枝さんから「シニグの踊り手が少なくなっているので力を貸して欲しい」と声をかけられた。照さんは、それまではシニグに関心が向かなかったが、元来世話好きの気性も手伝って、いとこでもある松枝さんの頼みを受けとめ、参加者をまとめる役目を引き受けるようになった。60歳を過ぎてちょうど、「田舎が恋しくなっていたころ」でもあったという。

照子さんたちが小学生のころに見たシニグは、とても活気に満ちていた。ムラ内だけでなく近隣からも多くの人踊りを見に来た。若い人たちも多かった踊りの輪のなかで、カンパー（鬚）を結ったおばあさんたちがとてもすてきだったことが印象に残っているという。また、通りにはみかんやサトウキビを売る店がたくさん出ていた。照子さんたちが中学1年のときのシニグ（写真1）をもう一度見てみると、サトウキビを売る店とそれを手にする子どもたちの姿が確認できる。大阪暮らしが長く70歳になってから沖縄に戻ってきたチエ子さんは、家の敷地内で実ったみかんを親がフクギ並木の下で売っていたと話す。

〈みかん売り〉 [2012-09-05]

チエ子：もう、ああいうの（ウシデーク）がいちばん楽しみでしたもん。その時季になるとね、うちのみかんが実るわけ、それを売ったり、親のお小遣い儲けで。だからもう畑ある人はサトウキビを売ったりとか、自分のとこの家で作ったのをみんな売ったり、みんなあつこのフクギの下みんな店だらけでしたよ。だから、今、（店は）何もないでしょう。それしか、楽しみなかったんだから。…あれだけが楽しみだった。一年に一度のウシデーク。

青いみかんの香りとともにシニグを想い出す人は少なくない。美津子さんもそのひとりで、彼女は中学を卒業するとすぐに普天間に働きに出たため、青年時代に踊ったことはない。しかし、小さいころに見ていたシニグの音色が耳に残っていたから、60代で初めて踊るようになって、すぐに入れたと話す。

〈耳に残っていた音色〉 [2014-03-07]

美津子：この歌は記憶にあるから、この歌の音色いうの、これは耳に残ってるから。だから入りやすかったはず。この踊りもたいがい（同じような手が）あるし。小さいときにね、聴いた音感いうのはね、不思議ね、いつまでも残ってるね。何十年もわたし向こう（大阪）にいてあれなのに。小さいときの、この音感いうのは、やっぱり聴かしておくもんだね、ずーっと何十年って記憶に残ってる。…この歌詞は今でも難しくて意味もわからんぐらいだけど。…ちょうどあのカチャーシー（祝いの席での即興の乱舞）始まったら、どんな人でも手出すというみたいな感じで、この何回か小さいときに見たの、あれがそのまま耳に残ってるさ。だからすぐ入れてるわけ。

照子さんとチエ子さんへのインタビューのさい、このところ毎年欠かさずシニグに参加していることを投げかけると、まずチエ子さんが「出なあかんという気持ちになるよね」と語れば、照子さんも「踊るのが楽しいいうよりかさ、何か気持ちが行きたい。気持ち的にもう、向こうむいてる」と応じた。この掛け合いから、シニグの場を盛り立てることを自分の役目として引き受ける彼女たちの姿勢が伝わる。中部から毎年10名近い参加者が出ているのは、まとめ役を引き受ける照子さんの献身的な働きとそれに応えるチエ子さんや美津子さんたちの動きがある。

IV. シニグの現在

1. 受け継ごうとする人たち

初めてシニグに立合った1993年のあと、二度目となった2000年には大正生まれのウタムチが減っており、2005年は中部郷友会からまとまった参加があった。いずれのときも踊り手は二十数名だった。そして2007年のシニグは、冒頭に記したとおり、ウタムチがいらないためテープで代用するという展開となった。

ところが、2009年には状況が一変する。備瀬の七月行事が本部町教育委員会の推薦を受け地域文化財として撮影記録されることになったため、ムラは、那覇、中部、名護の各郷友会に全面的な協力を依頼した。その結果、当日は大正生まれのウタムチ3名を含む65名の踊り手たちによって大きな三重の輪ができた。行事の期間中はわたしも、顔見知りのおばさんたちを車で送迎する役目を引き受け、お宮での歌合わせやシニグ本番の場へと乗せて行った。それからその後のなりゆきが気になって2015年現在まで毎年シニグ通いを続けてきた。この7年にわたる参与観察をとおして見えてきたのは、トシさん、久子さん、初枝さんという昭和10年代生まれの3人組がウタムチとして育っていく過程であり、照子さんを中心とした中部郷友会の面々の継続的なかわりだった。

トシさんは、1936（昭和11）年生まれ、2015年現在79歳。16歳で那覇に出たこともあり、

青年時代にウシデークを踊ったことはない。38歳のときに一家で大阪に移っても沖縄民謡を毎日のように聴いていた。59歳で帰郷。2000年のシニグで初めて会ったとき、「64歳になって初めてチヂンを持った」と嬉しさと不安のまじった表情で話していた。現在は、ウタムチの中心として、艶のある高い声でシニグ節を引っ張る。また、踊りを終えてのカチャーシーにはかならず加わり、盛り上げ役も担う。

トシさんの妹である久子さんは、1941（昭和16）年生まれの74歳。備瀬で育ち、那覇で暮らした後、1975年の海洋博を機に30代半ばで備瀬に戻った。以前はもっぱら手踊り専門だったが、トシさんが参加するようになってからはチヂンを持って内側の輪に入るようになった。「シニグは年配の人たちと一緒にいるから嬉しかった」と振り返る。彼女も民謡を歌うのが好きで、トシさんの高音と久子さんの中音が響きあうと何ともいえず心地好い。

初枝さんは、1942（昭和17）年生まれの73歳。千代さんがシニグ節を習ったミーヤグワーのおばあさんの曾孫にあたる。幼いときはこの曾祖母と一緒に暮らし、シニグ前に稽古に集うウタムチたちの歌声を聴いて育った。結婚後に10年間那覇で暮らしたのち1975年に帰郷。子育てが一段落してから琉球舞踊を習い始め、最高賞を受賞するまで極める。50代はこの踊りの腕前を活かしてムラの婦人会活動に打ち込んだ。この間、シニグには本腰を入れて参加することはなかったが、60歳を過ぎて、曾祖母の跡を継ぎたいという思いが強くなったという。背筋の伸びた立ち姿が美しく、手踊りの指導役を担う。

那覇郷友会婦人部（現在は女性部）においてシニグ参加を牽引してきた幸子さんは、80代半ばを迎えるなかで、立ち通しで踊るのが辛くなり、見る側に移った。同い年の小幸さんは参加の強い意志はあるものの、このところ身近慌ただしく続けての参加が叶っていない。そして現在、郷友会からのシニグ参加の中軸は、すでに述べたとおり、照子さんを中心としたほたる会や中部郷友会となっている。

シニグは、身近に不幸があった場合、「忌み」と呼んで参加を控えるのが習いになっている。喪中で祝いの場に出は神さまに失礼になるからと説明される。ただ、「身近」とはどのような範囲を差すのかはかならずしも明確ではなく、故人との関係の近遠や経過した時間、または死亡時の年齢などを考慮して判断される。たとえば、母親が亡くなった場合には三年忌を終えるまで、つまり亡くなって丸2年たたなければまず参加しない。亡くなったのがいところでまだ四十九日を過ぎていなければ、出ない。他方、きょうだいなどの近い関係でも、天寿を全うしたとみなされる年齢で亡くなり、しかも亡くなって数か月たっているような場合には、本人の気持ち次第で踊ることもある。ただ、本人の気持ちといっても「周囲のまなざし」をどう意識するかによって左右される心境ということになる。

2. 継承のかたち：2010年～2015年

現在、七月行事中にシニグ節が歌われる可能性があるのは、以下の9つの場面である。

20日、①ウプユミマー後のお宮でのカーリーシキ（嘉例付け）

- 23日、②お宮でウタムチの御願、③夜、男のハシチ後のお宮での練習
 24日、④お宮でウタムチの御願、⑤夜、女のハシチ後のお宮での練習
 25日、⑥シニグ当日の午前中、ノロ殿内（ニーヤー）でのカーシーキとお宮での御願
 ⑦昼ごろ、お宮で郷友会の面々と合流しての練習
 ⑧夕方、シニグ本番（4カ所で踊る）
 26日、⑨タムトノーイ

大正生まれのウタムチがまだ多かったときには、22日のサグンジャミの晩にも練習が行われていたが、近年この光景は見られない。また23日と24日にはウタムチの御願を日中に行っていたが、2011年からこの御願はハシチ後の夜の練習前に行われるようになった。つまり、②と③、④と⑤が一体化した。これは、夜ならば人が集まりやすいという事情が働いている。

これから、踊り手たちの動きを2010年から2015年まで、順にエピソードを織り交ぜながら紹介する。最初の2010年に限り、行事期間全体の流れがわかるように記述している。日付はすべて旧暦、年齢はその時点のものである。なお、ウタムチの中軸であるトシさん、久子さん、初枝さんについては、ともに行動することが多いこともあり、「トシさんたち3人組」あるいはたんに「3人組」とも記している。また、那覇郷友会と中部郷友会の参加者については、それぞれ「那覇組」「中部組」と記す場合もある。

(1) 2010年

前年が撮影班に対応した、いわばよそ行きのシニグという面があったため、この年の展開こそが重要と思われた。

15日、初枝さんが店番をしていた雑貨店のレジの前で、近づいてきたシニグについての話になる。「年配のおばさんたちがまだたくさんいるときは、自分たちが出ると遠慮して出なくなってしまうと思い、出たり出なかつたりしていた。でも、このままではウタムチがいなくなってしまうのではと心配になってきた。今年も、千代さんやウメさんをはじめ、先輩の方々には輪の中で座っていて欲しい。いるといたないのではぜんぜん違うから」。

19日、トシさんの家を訪ねて話を聞く。「シニグをやらないと落ち着かないのでは」と投げかけると、「そんなことはない。千代おばさんなんかはそう言うけど」と返される。千代さんの娘である和恵さんから、「家に来て、母からシニグ節を習ってほしい」と呼びかけられているが、機会がつかれずそのままになっているとのこと。

20日、ウプユミマー後の嘉例付けには、トシさん久さんが来ていたが、シニグ節を録音したテープが見つからず、結局歌えなかった。

23日、男のハシチ。14:30、ノロ殿内で神人3人と、トシさん、久子さん、ヨシさん（80歳）で歌を合わせる。千代さんは疲れているということで現れなかったが、もう一人の大正生まれのウタムチであるウメさん（92歳）は途中から手押し車でやって来た。ウメさんが歌に

加わると、にわかになんかの声の調子が上がった。やがてテープを止めて歌う。お宮に移ってウタムチの御願。ウタムトゥウグシーを回した後、小さな輪をつくり3曲歌う。テープなしでしっかり歌いきる。

24日、女のハシチ。10時に千代さんを車で迎えに行き、一緒にノロ殿内に行くが、まだ誰も来ていなかった。建て替えられて間もないノロ殿内を見るのは初めてという千代さんは、まず神さまに手を合わせる。しばらく待っても誰も来ず千代さんがしびれを切らしたところにトシさん姉妹が現れた。神人も一緒にノロ殿内の中でチヂンを打ちながら歌う。千代さんは歌うペースを指導したり、合間に「はんた廻い節」の「はんた」は糸を紡ぐ機のことだと教えたりする。庭に出て踊った後、お宮に移動してチヂンをウタムトゥ木に並べてウタムチの御願をする。その後、3曲踊る。13時前に一時散会。

〈エピソード1：シニグ節を伝え、受けとる〉

24日15時すぎ、娘の和恵さんが運転する車に乗せられた千代さんがふたたびお宮にやって来た。追ってトシさんたち3人組も揃い、稽古を始める。次の世代に伝えよう、受けとろうとする気が充満した密度の濃い時間が流れる。練習の合間にトシさんは、「90歳を過ぎた千代さんと70歳前後の自分たち、この間の世代がもっといればつながりやすいのに」ともならず。トシさん74歳、久子さん69歳、初枝さん68歳。「だから、カジマヤー（97歳の祝い）まで出て指導してください」と頼む3人に、千代さんは「勘弁してほしい」と苦笑い。その後、ミーヤグワーのおばあさんについての思い出話が続いた。初枝さんが現在は歌われなくなった「散山節」^{さんやま}を復活させると意気込み、千代さんからシニグ節を受けとる覚悟を口にしていて。16時半、デイサービスから帰ったヨシさんを迎え、さらに小一時間稽古を続ける。17時半前に散会。

このころの千代さんからは、上の世代から受けとったシニグ節を下の世代に受け渡したいという強い意志が伝わってきた。トシさんたち3人も受けとろうとする姿勢で応えてはいたが、千代さんの思いがたよく、やや物足りなさを感じているようにもみえた。

25日、シニグ当日。10時すぎからノロ殿内で嘉例付け。神人3人と千代さん、トシさん、久子さん、そして千代さんに乗せてきた和恵さんが参加。歌い手が少ないというので、ウタムチのウメさんとヨシさん呼びに行こうという話になる。「連れてくるのは石井さんの責任よ」というノロさんの強い一言に急ぎ走る。途中、同じくウメさんを探していた手押し車を押すマツエさん（86歳）と行き逢う。家近くで枯れ葉を掃いていたウメさんを見つけ、ノロさんが待っていることを伝えると「後で行くよ」との返事。それならばと、まずはヨシさんを車に乗せてお宮に戻る。ニーヤの庭で、椅子に座った千代さん、マツエさん、ヨシさんの3人を囲むようにして小さな輪ができる。千代さんはときおり立ち上がって足の運び



写真2 お宮での練習（椅子に座るノ口さんと千代さん（右手）、2010年）

方、バチの打ち方を指導する。お宮に移動しての練習ではウメさんも合流する。ウメさんの高い声に加わると全体の歌にも張りが出た。

歌とチザンの合わせがひと段落したころ、中南部の郷友会組が到着する。合流しての練習を始めるさい、忌みのため本番には出られないマツエさんが席を立つとウメさんも場を離れた。ヨシさんはもうひと頑張りするというので、お宮の中に千代さんとヨシさんを囲む二重の輪ができる。3曲合わせた後、「もう帰ろう」と言うヨシさんを車に乗せ、滞在先でもある彼女の家に戻る。

16時15分前、ヨシさんを車に乗せてふたたびお宮へ。ノ口殿内には紺地の着物を着けた女性たちが集まってくる。中部組の照子さんに声をかけられる。本番開始。ニーヤーでは千代さん、ウメさん、ヨシさんの3人が真真中で椅子に座ってウタムチを務め、その周りに二重の輪ができ、3曲踊る。アサギモーに出ていくときに歌われる道行きの歌は省略されて三々五々移動する（去年はテープの歌を流していた）。ミチルバヤーで3曲、アサギンシリーで3曲、子どもたちの扇舞にカチャーシー。そして最後アサギ前で5曲踊り、全体を終了。再び、扇舞からカチャーシーへ。シニグの踊り手たちも舞う。

26日、タムトノーイ。神人3人とトシさんたち3人組が参加。トシさんと久子さんは「去年よりずいぶん歌えた。声が出るようになった」と満足げに話す。「ふだんから千代さんのところに通って習ってください」と声をかけると、久子さんから「千代お婆さんはふだん一人でお家にいるの?」と問い返された。

この年、シニグの輪をつくったのは26名で、そのうち17名が中南部の郷友会組だった。そしてこのときが、千代さんがトシさんたちにシニグ節を受け渡す最後の機会になった。翌年からはウメさんやマツエさんも含め大正生まれのウタムチたちの姿がシニグの輪から消え

た。千代さんはこのあと持病の心臓病のため入退院を繰り返すようになり、2013年7月に94歳で亡くなった。

(2) 2011年

この年、千代さんが不在のため、トシさんたち3人組は大正生まれのウタムチでただ一人参加が見込めるウメさんに再三指導を依頼したが、結局、彼女は現れなかった。彼女なりの事情があったと思われるが、それを確かめることはできなかった。

〈エピソード2：テープに歌を乗せる〉

23日男のハシチ後の練習。神人3人の他に、トシさんたち3人組を含む6人が参加。5曲を二巡りする。トシさんの高い声がよく通る。「だいたい覚えているやろ」と得意げな彼女。久子さんは両胸あたりを痛めていて本番にチヂンを持てるかわからないという。当日は、テープを回しながら歌を乗せていくことにする。歌の指導を頼んだウメさんは結局、現れなかった。22時、散会。

24日、女のハシチ後の練習。神人3人の他に、トシさんたち3人組とチヂン打ちのキヨさん（84歳）たち、合わせて9人が参加。まずは座ったままで歌合わせ、それから立ってチヂンを叩きながら手と足の運び方を合わせる。「首里天加那志の出だしのところが難しくできない。同じ曲でも一番と、二番、三番とではずいぶん違う」とトシさん。「もう明日が本番だからこれ以上はできない。仕方がないからこのままでいこう」と久子さん。この日もトシさんの高い声がよく通っていたが、本人は「チヂンを叩きながらだと声が出ない」ともらす。「(ウタムチは) 90代の千代さん、ウメさんからいきなり飛んでわたしらやもん」といつもの愚痴がもれた。22:30、散会。

シニグ節を完全に歌えるウタムチが不在となった状況では、「テープに歌を乗せていく」という進行は現実的な選択といえた。「首里天加那志」の一番は、二、三番と違い曲調がゆっくりで歌いづらいというのは、千代さんも指摘していた。

〈エピソード3：形見の着物〉

25日、シニグ本番。那覇からはマイクロバスで15名が駆けつけ、そのうち11名が踊りに参加した。そのなかに幸子さんもいた。4日前に那覇での模合の席で会ったときに彼女は、「シニグで踊りたいけれど、もう長く立ってられないから出られない。代わりに妹を踊らせる」と話していたので、着物姿の彼女を見つけたときには少し驚いた。最後のアサギモーでの踊りのみ、内側の輪に入って踊っていた。無事に踊り終えて帰途に着くとき、「(亡くなった姉の) ミエさんも喜んでいるでしょうね」と声をかけると、「これ、姉の形見を着て踊りました」と自分の着物を指した。「妹に踊らせようと思ったけど来られなかったの、自分で踊りま

した。休み、休みしながら」。

この日、形見の着物を着て踊ったのは、姉の三年忌を終えたばかりの幸子さんだけではなく。同じバスで来た小幸さんも母の着物を着ていたと後で教えてくれた。またこのエピソードから、シニグの踊りはゆったりとした手足の運びのため体の動きが多少衰えても参加できることがわかる。

26日タムトノーイには、神人3人の他、トシさんたち3人組を含めて8名が参加した。「去年よりずいぶん歌えるようになった」とトシさんと久子さんが嬉しそうに口にする、ニガミの松枝さんが「来年に向けてふだんから練習してください」と投げかけた。トシさんは「いつも行事が始まるころになって練習しだす。時季が近づかないと練習する気が乗らない」と応える。去年も似たようなやりとりがあったことを思い出す。

後日、今後の参考にしてもらえればという思いも込めて、ウシデークを撮ったビデオをトシさんたち3人組と那覇の幸子さんと小幸さん、中部の照子さんとチエ子さんに送った。

(3) 2012年

この年は4年に一度の豊年祭が翌月に控えていたため、踊りの指導役を務める初枝さんは連日公民館での稽古に詰めていた。20日ウプユミマー後の嘉例付けと、23日および24日の男女のハシチ後のお宮での練習をトシさんと久子さんが主導し、初枝さんは豊年祭の稽古を抜け出して合流した。トシさんは練習の合間に「シニグ前になったらしぜんシニグ節のテープをかける」と話していた。和恵さんは、入院中の千代さんのことをシニグ当日には車椅子で連れて来たいと言っていたが、叶わなかった。

〈エピソード4：同級生どうしの再会〉

25日、シニグ当日。午前中、ニーヤーでの嘉例付けを終え、もうそろそろ中部組が来るころだということで、11:45には神人とウタムチ、チヂン打ちたちがお宮に移動する。間もなく中部組の面々が到着すると、その中にいた一人がノロさんの姿を認め、「チヨ!」と名前を呼びながら駆け寄ってきた。その声に気づいて振り返ったノロさんは、声の主を見つけて笑顔になり、二人は手を上げて踊った。

シニグは離れて暮らす者どうしが再会する機会でもある。懐かしい顔に久しぶりに会って喜びあう姿が毎年みられる。この年、中部組の参加は9名で、那覇組は幸子さんと良子さんの姉妹のみだった。そして、幸子さんは見学する側に回り、踊らなかった。

〈エピソード5：健康願いと囃しの声〉

25日、シニグ当日。中南部組は到着すると健康願いの祝儀袋をノロさんや松枝さんに手

渡した。神殿の前に座った二人は、松枝さんが袋に書かれた名を読み上げ、ノロさんがそれを受けとって神前に捧げ、共に拝む。ちょうどお昼前となったので、歌合わせは、弁当を食べてからということになった。…13時、お宮で5曲を二巡り、歌合わせをする。くびる並松節では、押し手を右から出すのか、左から出すのかにまごつく。はんた廻い節では、ほとんどの人が歌詞をわからず声が出なかったが、「サーサ」という合いの手だけ大きくなるのがおかしくて、皆で笑いあう。完璧に歌うだけでなくこのような継承のかたちもあるのだとしみじみと思う。

踊り手たちは、自身の健康願いと称して祝儀を供えることが習いとなっている。神人はそのひとりひとりに線香を手渡し、ふたたびそれを受け取って神殿の香炉に立て、名前を読み上げて各人の健康を祈願する。シニグは、今年もまた健康で踊ることのできる喜びと感謝が表現される場でもある。

(4) 2013年

シニグの前の月に千代さんが亡くなった。義弟を亡くした初枝さんは参加しなかったため、トシさん、久子さん姉妹がすべての場を仕切った。この年、シニグ本番の踊り手たちの顔と名前は9割方わかるようになった。

〈エピソード6：母親の跡を継ぐという決意〉

明日から七月行事が始まるという19日の午前中に、先月亡くなった千代さんの霊前に手を合わせに行く。和恵さんが玄関の掃き掃除をしていた。毎日泣いているような顔に見えた。線香を上げ、遺影に手を合わせる。亡くなる時の様子を少し聞かせてもらおう。帰り際に、「何年かしてウシデークの輪に加わってください。千代さんもそれを待っているはずですから」と声をかけると、「三年忌を終えたらやるつもりです」との答え。かならずよき後継者になると思う。

母を亡くした和恵さんは、翌年は神酒づくりの裏方を担い、そして三年忌を終えた2015年には、本人が言ったとおり踊りの輪に加わった。

〈エピソード7：丑年の同級生〉

25日、シニグ本番。那覇からは4名、中部からの参加は当初の見込みより一人増えて8名となった。中部組が例年並みの参加数であることを受けてニガミの松枝さんは、「ウシチュー（丑年の人、同級生のこと）のみんなが来てくれるとホッとすると嬉しそうに話す。昼前、中部組のまとめ役である照子さんをお宮で見つけた松枝さんは、声をかけ抱き合い喜んでいた。…15時ちょうど、紺の着物を着けた松枝さんがノロ殿内に向かうときに声をかけ

てくれたので、後を付いていく。本番までの時間、照子さんと松枝さんのいところ同士の思い出話に立ち会う。照子さんは、志願兵として伊江島で亡くなったお兄さんのこと、そして戦後になって母親が毎日その伊江島を見て泣いていたことを語る。それを受けて松枝さんが「伯母さんの戦後は、本人が亡くなったときようやく終わったんじゃないか」と返す。

照子さんたちは、自分たちの世代はいとこといとうと今のきょうだい以上に近い関係だとよく話す。夫も戦中に亡くした照子さんの母親は、女手一つで懸命に6人の子どもを育てた。松枝さんにとっても、伯母が抱えていた日々の悲しみは身近なことだったにちがいない。

〈エピソード8：内側の輪に加わる〉

25日、シニグ本番。11時すぎ、神人がお宮に入ると、踊り手ひとりひとりに線香が手渡され、皆で拝む。その後、お宮の中で練習が始まる。トシさんが声を出して場を引っ張り、「曲と曲とのあいだは少し時間をかけて円を回るようにしよう。そうしないとウタムチが休めなくてきついから」などと声をかけていた。また、中部組の敏子さん（83歳）はチヂンを手に取りながら「前からこれやりたかった」と言って、トシさんや久子さんたちのいる内側の輪に加わって踊った。また、外の輪にいた光子さんに向けて、太鼓と太鼓の間に入って踊るようにとの声が飛んだ。彼女はその声を受け、内の輪へと移動した。練習の途中、張り切る敏子さんは、トシさん、久子さんにもっと大きな声を出すようにとはっばをかけていた。

踊りの輪は、内側に熟練者（ウタムチやチヂン打ち、また太鼓は持たなくても手踊りが上手な人）が位置し、外側には相対的に経験の浅い人が並ぶ。この配列により、初めて踊りに参加した人でも内側の人を手本に見よう見まねで踊ることができる。だから、手本が必要な人にとっては、内の輪にはチヂン打ちだけではなく、手踊りの人がいてほしい。光子さんは、そのような手本になる人として内側で踊るようにと声をかけられた。また、敏子さんは長年手踊りをしていたが、いつか太鼓を持って踊りたいという長年の思いを今回実現させた。彼女は翌年も太鼓を持って踊っていた。

〈エピソード9：テープを止めて歌う〉

26日、タムトノーイ。神人3人を前に、トシさんと久さんがテープをかけながらシニグ節を歌う。最初の首里天加那志を終えたところで、ノロさんが「テープを止めてやってみなさい」と声をかける。二人はテープなしで天の群星をほぼ完璧に歌いきった。より難しいとされる打豆節では途中つまるところもあったが、歌い終えた。ノロさんは、「ほら、できるよ。テープなしでやった方がいいよ」と二人の背中を押していた。トシさんは「首里天加那志の出だしが難しい。今回は、子どもと孫が7人も来ていたから、家で歌の練習もできなかった」などと言いながら、まんざらでもない表情だった。

これは、テープのないシニグが復活することを予感させるエピソードともいえそうだが、事はそう簡単ではない。仮にトシさんたちがシニグ節を5曲すべて歌えるようになったとしても、二人だけでウタムチを担うことは難しい。かつてのように歌と囃しを交互に担えるような人数が求められる。とはいえ、明るい兆しが見えてきたことも確かである。

(5) 2014年

この年は、トシさん、久子さん姉妹がいところを亡くして四十九日を過ぎていなかったため、行事の表舞台には参加しなかった。昨年参加しなかった初枝さんも当初、今年までは忌みだから踊れないと言っていた。そのため、ウプユミマーの嘉例付けはテープの歌に神人たちが手を合わせて踊るのみとなった。男のハシチ後の練習には初枝さんだけが参加し、翌日の女のハシチ後の練習でようやく3人が顔を揃えた。シニグ当日は初枝さんの参加を期待する声が多く、彼女自身も迷っていた。トシさん、久さんが不参加ということもあって、ひとりで参加するのが不安だったのかもしれない。

〈エピソード10：手本の不在〉

25日、シニグ当日。昼すぎ、中南部組も含めて踊り手たちがお宮に集まり、歌と踊りの手を合わせようとする。しかし、手本となる3人組がいないため、なかなか始められない。「トシ、久子はどうした、初枝はどうした」との声が聞かれたが、初枝さんが合流したのは13時すぎだった。それからテープをかけて5曲を三巡り、歌と手を合わせる。途中、久さんも練習には加わったが、やはり本番には出られないとのこと。ウタムチは不在、チヂン打ちも初枝さんが出なければ皆を引っ張る人がいない。…16時ごろ、いつもと同じニーヤーから本番が始まるが、初枝さんの姿はなかった。テープを頼りに踊り始めるが、どこか心許ない。首里天加那志を終えるころ、マンサージを締めた初枝さんが現れる。しばらく外からチヂンを叩いていたが、やがて促され、覚悟を決めたかのように輪の中に飛び込んだ。初枝さんのチヂンが入ることで明らかに踊りの輪が落ち着いた。トシさん、久さんがいないため、テープ以外の歌があまり聞こえなかったのは寂しかったが、他の3カ所でもぶじに踊りきった。

翌日、タムトノイの席で初枝さんは、「昨日は余計な心労をおかけしてすみませんでした」と神人3人に頭を下げ、「じつは那覇から来た幸子さん（初枝さんの大伯母にあたる）から出るようにときつく叱られて決意した」と舞台裏を明かした。そして後日、彼女は、ノロさんから「あんたが出てくれて涙が出そうになったよ」と声をかけられたことを伝え、出て良かったと話した。

チヂンの先導役を務める初枝さんは最終的には参加したものの、3人組が揃って不在のときの皆の動揺ぶりから、彼女たちの存在の大きさが浮き彫りになった。3人こそが現在のシ

ニグを支える中心であると皆が痛感した場面だった。

(6) 2015年

この年は、3年ぶりにトシさんたち3人組が揃って参加した。また、千代さんの三年忌を終えた和恵さんがシニグの輪に加わった。他方、ノロさんは夫を亡くしてまだ四十九日が過ぎたばかりということで、ノロ殿内やお宮での拝みだけでシニグ本番には参加しなかった。中部組では、ふたたび大阪に戻ったチエ子さんは、裏方の神酒作りの手伝いもするために大阪からやって来て、ウプユミマーからシニグ当日までムラ内の民宿に滞在した。ウシデークの練習が始まったのは、ここ数年と変わらず、23日の男のハシチ後からだった。

この年、シニグ当日の参加者については、ほぼ全員のことがわかるようになった。

〈エピソード11：初めての参加〉

25日、シニグ当日。今回の那覇組のなかに久しぶりに再会したミツさんがいた。挨拶を交わしたとき彼女は、「(かつてシニグによく参加していた) ナエの娘ですから、来ました。見るのもするのも初めてです」と話した。昼食後、お宮で練習が始まる。手と足の出し方を確認しながらの5曲をひと巡り。そして、二巡り目。ジンビョーシの扱い方を初枝さんが皆に示すと、ミツさんがそれを熱心に見入り、「もう一度やって」と声をかけていた。…本番の踊りを終えた彼女に声をかけると、「もう疲れました」と言いながら満足そうな表情をみせた。

このエピソードのように、母親の跡を娘が継ぐという例は他にもいくつかみられた。またすでに指摘したように、ウシデークのゆったりとした手足の動きは、初めて参加した人でも内側の踊り手を手本にしながら付いて行くことができる。

〈エピソード12：シニグを背負う〉

26日、タムトノーイ。お宮で神人3人とトシさんたち3人組がシニグ節を3曲歌う。3人の声がきれいに重なりあい、難しい打豆節を完全に歌えるまでもう一息との印象を受けた。歌い終えて、トシさんと久子さんが「自分たちのおばあ(祖母)は目が見えなかったが、きれいな声をしていた」と話せば、初枝さんは「パッパー(祖母、ここでは曾祖母を指す)の歌を聞いて育ったけど、自分がシニグ歌を覚えようという気はまったくなかった」と話す。そんななかで、ノロさんが「ほんと、あんたがた3人がシニグを背負ってくれるよう、お願いします」と声をかけた。それを受けて初枝さんは、「ウタムチは、あと2人は欲しい」と言い、その候補になりそうな人の名前を挙げた。久子さんは「シニグ節の歌詞集は目の付くところに置いてある」と応えた。さらに3人は「来年に向けてもう1曲できるようにしておこう」と言い、その後すぐに「毎年同じようなことを言っている」と笑いあった。

この年、トシさんは介護の必要のある夫の世話をやりくりしながらの参加だった。タムトノーイという神前の席で、ノロさんは改めて3人への期待を伝えた。3人が経験を重ねてウタムチとしての力をつけるにつれて、周囲もまた彼女たちこそが踊りを引っ張る存在であると期待するようになる。そして、本人たちもまたその期待に応える姿勢で場に臨むことにより、さらなる成長が導かれる。6年間の参与観察からこうした循環がみえてきた。

V. 踊りの輪に加わるということ

1. 三重の輪：踊りの場の身体配列

2015年のシニグ当日に、中部と那覇の面々が合流して行われたお宮での練習場面を再度取り上げたい。

〈エピソード13：踊り手の位置が定まる〉

13:30、神人が主導する健康願の御願を終えると、そのままお宮の中で踊りの練習が始まった。5曲を二巡りするうちにメンバーも整い、三巡目に入るときには、内と外それぞれの輪に位置する踊り手が定まった。内側は太鼓を持ったトシさんたち3人組と手踊りの熟練者5人で、すべてムラ在住者だった。外側は17人から成る手踊りの輪となった。

このエピソードからも、踊りの輪は図1のような身体配列（菅原, 2004）¹³となっていることが確認できる。つまり、③内の輪は、太鼓を打ちながらシニグ節を歌い手踊りの手本を示す熟練者の輪であり、②外の輪は内側の踊り手を参照しながら踊る経験の浅い人の輪といえる。エピソード8にあった光子さんの例が示すように、手踊りの熟練者が外の輪で踊っているときには、手本を求める人たちによって内の輪へと送られる。また、エピソード11のミツさんのように、外の輪にはまったくの初心者であっても、当日の練習を経て加わることができる。手踊りは曲ごとに決まったパターンが繰り返されるため、初めての人でも手本を真似ながらなんとか付いていけるし、どの歌もゆったりとしたテンポなため、見よう見まねでワンテンポ遅れていたとしてもさほど目立たなくてすむ。そして、踊りがゆっくりであるというこの特徴は、老年者の参加を容易にする条件となっている。

ただし、かつては外の輪で踊る人たちもしっかり稽古を積んでから当日を迎えていたことが、ノロさんのつぎの語りからわかる。

〈昔の練習風景〉 [2012-09-07]

ノロ：（練習に参加する人は）もう〔語気強く〕昔はいっぱいだったよお。もう昔の面影は

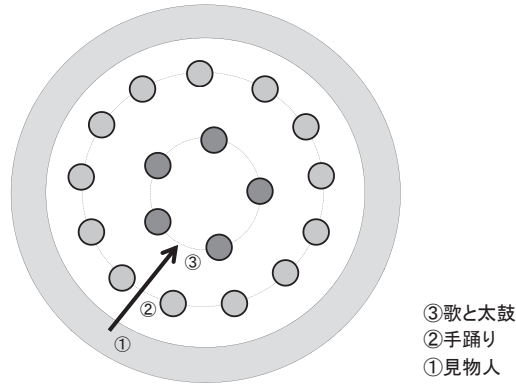


図1 踊りの場の身体配列

ぜったいないさ。おばあちゃんなんかもう、お宮の（前に）ぜんぶ座っておって、この真ん中で（後輩たちに）練習させよったの。だから、「あんたの手はこんなじゃない」と言ってね、あのおばあちゃんんかが手叩いて、「どんなにしなさい」と言って、もうぜんぶ教えよった。…25日（シニグ当日）の朝まではね、このおばあちゃんんかがぜんぶ座ってよ、ほんともう、「どんなにしなさい、こんなにしなさい」と言ってや。今は、ただ人の真似やって、中南部から来る人なんかはやるけどや、（昔は）あのおばあちゃんんかが立派に教えよった。

ノロさんも指摘するとおり、現在、郷友会の参加者は当日の午前中に駆けつけ、お宮での練習を幾度か繰り返すだけで本番に臨んでいる。もちろん毎年参加しているため熟練者の域に達している人たちもいるが、踊りが覚束ない人もまた少なくない。そのため、全体の手がきれいに揃わないことにもなるが、その一方で誰もがあまり気後れすることなく参加することができる。参加のさいのこの敷居の低さが現在のシニグの特徴といえるだろう。

ところで、身体配列という観点からかつての踊りの輪（写真1）を眺めてみたとき、現在は失われたもうひとつの特徴について指摘できる。それは、二重の踊りの輪を取り囲むようにして見物人たちの輪が分厚く形成されていた点である。とくに、この輪には多くの子どもたちが交じていたことに重要な意味がある。踊りの外の輪に若い娘たちが多く、内の輪に太鼓を持った熟練者が位置していることをふまえれば、この三重の輪には、①幼いときに踊りを見ていた人が、②青年になって輪に加わり、③長年の経験を積み重ねて中・老年期にはウタムチを務めるようになる、といったライフサイクル全体に渡る社会化の過程が織り込まれていることに気づく。ここで、節子さんと照子さんが子どものころのシニグにふれて、「髪を結い上げたおばあさんがきれいだった／すてきだった」と同じような印象を語ったことを思い起こしたい。千代さんの例にみるように、ウタムチとしてシニグ節を完全に身につけるまでには長い年月がかかる。それゆえ、内側の輪で太鼓を持ってシニグ節を歌う年配者たち

は、周囲から尊敬のまなざしを受ける眩しい存在であった。二人が用いた「きれい」や「すてき」という表現にはこうしたまなざしの質が反映されている。

現在、内の輪はトシさんたち3人組をはじめとしてムラ人が中心となり、外の輪は中南部から加勢に来た郷友会の人たちによって支えられ、いずれも中・老年者が大半を占めている。そして、これら踊りの二重の輪を取り囲む見物人の輪はずいぶん薄くなり、その年齢層も踊り手たちと変わらない。そして、子どもの姿は見当たらない。シニグ行事は、ムラ人と都市に住む出身者を結びつける得がたい機会になっているものの、かつてのようにすべての年代の女たちが交わる場ではなくなった。

身体配列からよみとれる以上のようなシニグの場の構造をふまえると、この行事を今後も継続させるためには、青壮年者たちを踊りの輪に誘うとともに、子どもたちに踊りを見せるための工夫を凝らす必要がある。美津子さんが語ったように、年に一度の見る機会を重ねることで歌が身にしみ入って記憶に残り、いつかこの輪に入りたくなるかもしれない。こうした三重の輪を取り戻すことが、踊りと歌の継承を潤滑にする鍵となるように思う。

2. 変化のなかの連続性

15歳（1952年）のとき、同郷人が営む大阪のメッキ工場に働きに出たチエ子さんは、年を重ねるごとにふるさとの同級生が恋しくなって、70歳（2008年）になると沖縄に帰ってきた。ただ住むところは、ふるさとの備瀬ではなく、沖縄市にある姉の家の近くにした。同級生も、備瀬に残っている人は少なく、中南部に居を構えている人が多いという事情も働いた。そして、沖縄に戻った翌年には、新天地市場で緋の着物を買求め、照子さんたち同郷の同級生とともにウシデークの輪に加わった。

久しぶりのふるさとはさぞ懐かしかったでしょうと、チエ子さんに投げかけてみたところ、意外にも彼女は、「現在の備瀬を歩いてみても昔の面影はぜんぜん浮かばない」と答えた。そして、「目をつぶってはじめて子どものころの面影が浮かぶ」と付け加えた。そう語った彼女には、大阪にいるときに頭の中から消えないふるさとの光景があったという。それは小学生のとき、日差しが強くて畑に出られない日中に、屋敷内の木陰に敷いた^{むしろ}筵に集まってきたおばさんたちとのふれあいのひとときだった。

〈筵の上でのシラミ取り〉 [2013-08-07]

チエ子：わたしら小ちゃかったでしょう、まだ（小）学校行ってるぐらいやから。子どもたちに（髪の分け目のところにいる）シラミをこうして（かき分けて）取らしよったんです。そういうのもひとつの集まりだったし。で、昔はテレビも何も、楽しいもんも何もないもんやから、けっきょくおばあちゃんたちが集まって、ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃ世間話とかやって、楽しみがあったんですよ。

それをね、わたしは大阪におるときですよ、そういう面影が、もう頭の中から消えない

わけ。で、沖縄帰ったらそういう光景もまた見れるのかなあ思うて、思ったんですよ。それがいま、何にもないです、そういうこと。おばあちゃん連中がみんな、いなくなったのか。みんなあっち、マチ（那覇や中部に）出てしもうて、おばあちゃんばっかり。で、おばあちゃんらもみんな亡くなって、けっきょく屋敷も空屋敷になってますわね。だから、そういうようなことね、〔語気強く〕ほんと、ないでしょ、ほんとに、どこ行っても。

チエ子さんは、屋敷に集まったのは「おばあちゃんたち」と表現したが、じっさいには自分の母親たちの年代の「おばさんたち」であつたらしい。ともあれ、彼女が語る、小学生の女の子に近所のおばさんたちが頭のシラミを取らせているといった光景は、大人と子どものふれあいが醸し出す穏やかで温かな雰囲気伝える。彼女は、沖縄に戻ったらそんな光景がまた見られると期待していた。しかし、ふるさとを不在にしていた50年余りの間に、多くの人は都会に移り、なじみのおばさんたちも亡くなり、そうしたふれあいの光景はムラから消えていた。その現実を前にしたときの嘆きがここで語られている。端から見れば、50年余りの間にムラの景観や人びとの暮らしぶりが変わらないはずがないと思うだろうが、彼女は、遠く離れた土地で暮らす間も変わらずにこの面影を抱きつづけ、ときにこの面影に支えられながら生きてきたにちがいない。むしろ50年を越える年月の間にこの面影は彼女の中で純化され、「頭の中から消えない」光景として定着していった。だから、現在のムラを目の当たりにした彼女が、その面影との隔たりに衝撃を受けたのも当然だった。ふるさとを不在にしていた者は、変化の渦中を体験できず、出郷と帰郷という二つの時点の落差に直面させられて戸惑うほかはない。

チエ子さんの同級生の美津子さんもまた、22歳から20年間の大阪暮らしを経て沖縄に戻ってきた。この間に沖縄は、人の情けが薄くなっていたことに驚いたと話す。

〈20年の間の変化〉 [2014-03-07]

美津子：昔のほうがね、人間の心はね、今の人の、もう十倍もいいさ。大阪に20年住んでおったわけ、わたし結婚してから。で、20年間向こうにおつて、帰ってきたら、やっぱり20年でね、人の心つて、やっぱり人の考えもゴロツと、本土に近いものの考え方になつた、情が薄れて。…20年でね、もう、すごい変わった。そのうちに本土復帰もいろいろあつたさ。だからいろんなもう、こう自由になつて、ラジオが、テレビが入るしラジオが入るし、あの時分までは、わたしがいた時分まで、テレビもないし、ラジオも親子ラジオつていうぐらいのときに向こう、昭和33年だったかね、本土に行ったとき。だったから、開けてない時分だから、ぜんぜん違ったわけ。帰ってきて、人間つてこんだけ変わるんだねえと思って、だから帰ってきても4、5年ぐらいは溶け込みにくくて、あれだった。普通にみんなと交際はしてるんだけど、「あーこんなんだつたね」みたいな感じ。

ここでも不在の間に生じた落差に戸惑う美津子さんの姿が語られている。彼女は、大阪に出て、何より、きょうだいどうしの仲が薄いのに驚いたという。しかし、20年ぶりに戻ってきた沖縄もまた人の情けが薄くなっていた。それは、自給自足の暮らしから給料生活になったからだ。彼女は考えた。「給料生活だったらがむしゃらでしょ。それでみんな欲が出て、個人主義になって、親もきょうだいも。きょうだいはじめ、みんな（仲が）薄れていくさ」。ムラに、あるいは沖縄に、「情けがなくなった、薄くなった」との受けとめは、ふるさとを離れ長くマチに住む人たちが抱く共通の心情といえる。チエ子さんたちより6歳年上の小幸さんは那覇に住んでおり、備瀬に帰る機会はけっこうあるものの、以前のように「ゆっくりお茶を飲んでいきなさい」と声をかけてくれる人もいなくなり、味気なくなったと嘆いた。そして、海洋博以降のふるさとの変わり様には戸惑うばかりで、自分たちはまるで「浦島太郎のようだ」と笑った。

備瀬というムラはいまも、防風・防潮・防火などの役目を果たすフクギ並木に包まれ、昔ながらの集落景観を残していると紹介されることが多い。しかし、ここで子ども時代を過ごした彼女たちにとっては、「昔ながらの」ムラはもはや存在していない。そんな彼女たちが年に一度のシニグという伝統行事の場に駆けつけ、踊りの輪に加わることにはどんな思いが込められているのだろうか。

小幸さんは、2011年のシニグで、ウタムチを長く務めた母親の着物を着て踊ったと教えてくれた。幸子さんもまた、ムラの神人であり、那覇郷友会の婦人部の面々をシニグの場につないだ姉のミエさんの着物を着て踊ったと語った。和恵さんは、大正生まれの最後のウタムチとなった千代さんを亡くしたあと、喪の期間を経て母親の跡を継ぐようにしてシニグの輪に加わった。70歳で沖縄に戻ってから6度のシニグを体験したチエ子さんは、2014年11月、娘たちのいる大阪にふたたび戻った。そして2015年のシニグには大阪から帰ってきてムラ内の民宿に泊まり、神酒づくりの裏方を務めながらウシデークを舞った。同じ年、神戸に住む姉の夫を亡くしたばかりの照子さんは、自分は踊れないにもかかわらず、いつもどおり同級生たちをまとめてシニグの場を盛り立てた。

青年期にムラを離れ移動先で年を重ねた彼女たちは、子ども時代のふるさとの面影と現在のムラの姿との落差に戸惑いを抱えながらシニグの場に足を運んでいた。景観も人も変わるなかで、この行事もまた変わった。シニグ節を完璧に歌えるウタムチはいなくなり、テープの助けが欠かせなくなった。そして、踊りに参加するムラ人も減り、郷友会からの加勢がなければウシデークの輪はもはや成り立たなくなった。しかしそれでもなお、シニグは今も続けられている。この日に母村に駆けつける彼女たちにとって、古い先祖の代から連綿と受け継がれてきた踊りの輪に加わることは、子ども時代とは大きく変わったふるさとのなかに連続性を見出し、自己をその連続性に位置づけようとする営みのようにみえる。

【注】

- 1 石井宏典 [2014] 「祈りの姿勢：ムラの神行事を守りつづける神人たち」『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』16, 1-31頁。同 [2014・2015] 「ムラが生んだノロ（上）（下）：沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー」, 同紀要17, 1-30頁および18号, 1-29頁。
- 2 仲田善明 [2003] 「備瀬のシニグ」『本部のシニグ』沖縄学研究所, 257-282頁。
- 3 各年のウシデーク参加者数は以下のとおりであった。2010年：26人（うち那覇組4、中部組9、名護組3）、2011年：36人（那覇11、中部9、名護2）、2012年：27人（那覇1、中部9）、2013年：26人（那覇4、中部8）、2014年：21人（那覇5、中部6）、2015年：28人（那覇4、中部9、名護2）。
- 4 遠藤美奈 [2006] 「安田郷友会のウシデーク活動」『ムーサ：沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』7号, 9-21頁。遠藤美奈 [2012] 「安田郷友会とシニグの「ウシデーク」」『民俗音楽研究』37号, 25-28頁。
- 5 林秀佳 [2012] 「国頭村字奥のウシデーク：奥郷友会のウシデークの事例を中心に」『在那覇奥郷友会創立60周年記念誌：郷愁』, 132-158頁。
- 6 語りを引用するさいの表記については以下のとおり。タイトル脇の [] は聞きとりを行った年月日、〈 〉内は聞き手の発話、()内は著者による内容の補足、〔 〕内は著者による語り場面の補足。語りの中の…は、中略。
- 7 備瀬はアサギ（お宮）を境に南と北の地区に分けられる。千代さんの家は北にある。
- 8 新天地市場の備瀬出身者の動向についてはつぎを参照のこと。石井宏典 [2008] 「ならいとずらしの連環：那覇新天地市場の形成と展開」サトウタツヤ・南博文編『社会と場所の経験』東京大学出版会, 45-76頁。
- 9 シニグ節の歌詞については以下の各資料を参照した。「凌ぐ節綴」（手書き。1952年に当時の仲村信助区長・兼次長宛書記他が具志堅ムタ（85歳）、仲村ウシ（77歳）他から採録した旨が記されている）、仲田栄松 [1984] 『備瀬史』本部町備瀬区事務所発行、「備瀬村のシニグ節」（手書き。1985年、浦崎芳子作成。比嘉カメ（85歳）、玉城千代（65歳）他から採録）、武藤美也子 [1994] 「備瀬のシニグ歌」高阪薫・秋山紀子・武藤美也子・神野富一編『沖縄祭祀の研究』翰林書房, 294-301頁、仲田善明 [2003] 前掲書。
- 10 歌詞の進行が速く軽快となる箇所。小林公江・小林幸男 [2014] 「沖縄本島北部の白太鼓」『京都女子大学研究紀要（宗教・文化研究所）』27号, 35-59頁。
- 11 備瀬はかつて、小浜村と備瀬村に分かれていた時期があった。
- 12 備瀬出身者によるメッキ業の展開についてはつぎを参照のこと。石井宏典 [2000] 「「同志会」という共同の物語：沖縄のある集落出身者たちの並ぶ場所」やまだようこ編『人生を物語る』ミネルヴァ書房, 113-142頁。
- 13 菅原は、身体配列のパターンは社会関係を具象化したものであることを指摘している。菅原和孝 [2004] 『ブッシュマンとして生きる』中央公論新社。

付記

シニグについて、玉城千代さんと上地ミエ子さんから多くのことを教えていただいた。お二人をはじめ、この行事の場を支えてこられた先達たちの霊前にこの拙論を捧げたい。

本研究は、JPSP科研費（21530652および25380841）の助成によって支えられた。